活用現場レポート

原いちご農園

福岡県八女市　いちご

福岡県八女市でいちごの生産をされている原いちご農園様。
原いちご農園様では、2010年より業務用FFC元始活水器V65型を導入いただき、現在は5反の耕作面積で反当5.8トンのいちごの収穫を実現されています。
今回はいちごへのFFC活用方法と効果についてご紹介いたします。

ハウス内の様子

代表者のお話

代表
原 浩平様

先代の時にFFCテクノロジーを知り、2010年に業務用FFC元始活水器を導入しました。その後、FFC元始活水器の効果検証をするため、一時期カートリッジを取り外しました。その際、いちごに炭そ病が発生し、すぐにカートリッジを元に戻したことを覚えています。今ではFFC元始活水器だけでなく、FFCエースやFFCパイロゲンを取り入れ、年々、大きな効果を実感できています。
これからも安定した農業を目指し、FFCを上手く取り入れ、工夫をしながら生産に励みたいと思っております。

FFCを活用したいちご栽培

原いちご農園DATA

- ●作付品種 …… あまおう
- ●耕地面積 ‥5反（≒5,000㎡）
- ●出荷先 …… JA福岡八女
- ●栽培方法 …… 土耕

収穫終了（5月上旬ごろ）

●5月中旬　耕起（苗ごとトラクターで圃場に打ち込みます）

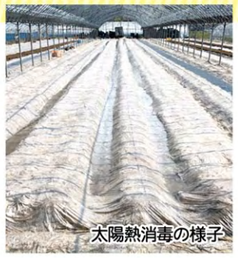
●7月上旬

①資材投入
- ・FFCエース散布（反当たり120kg）
- ・もみがら堆肥散布（反当たり1トン）
- ・窒素肥料 …圃場に持ち込んだ苗を早く腐らせるため、少し多めに投入します。

②耕起
③ビニールで土壌を被覆
④水漬け（1週間ほど）
水漬けにより酸素を遮断し、連作障害の原因となる好気性病原菌のフザリウムを死滅させます。

●8月いっぱい

土壌を太陽熱消毒します（約1ヵ月間）。ビニールで土の表面を被覆し、地温を40～60度まで上げることで、土壌中の雑菌が死滅し、クリーンにする効果があります。太陽の熱を使うため、農薬などに頼らない環境にやさしい土壌消毒の方法です。


太陽熱消毒の様子

●9月中旬　いちご苗の定植

定植後は水を切らさぬようにFFCウォーターのかん水を行い、パイロゲン希釈液（開花までは2000倍、開花後は1000倍）を週1回散布します。

苗ができるまで

・苗作り

ランナー（ツル）を切り取り、FFCウォーターで希釈した発根剤に浸漬し、ポット苗を作ります。

・鉢上げ

ポット苗をパイロゲン2000倍希釈水に浸漬させ、鉢上げをします。その後、根張りを良くするために冷蔵庫で3日間寝かせます。

・育苗

育苗時はパイロゲン2000倍希釈水を週1回苗に散布します。

業務用FFC元始活水器 V65型

11棟あるハウスすべての水がFFCウォーターです。

収穫開始（11月下旬ごろ）

FFC活用の効果

●柔らかい土壌になった

土壌が柔らかくなり、根の張りが良くなりました。

●苗が健全に生長するようになった

茎にはびっしりと毛が立ち、葉の厚みもしっかりあるため、虫も寄り付きません。

●欠株がなくなった

全ての株が健全に生育するため、欠株が1つもありませんでした！

●病気の発生率が減少し、農薬の使用量が半分になった

FFCを導入する以前に比べて、農薬の使用量が約半分になりました。うどんこ病の発生率も大きく減少し、硫黄によるうどんこ病対策も不要になりました。

●クラウンが大きくなった

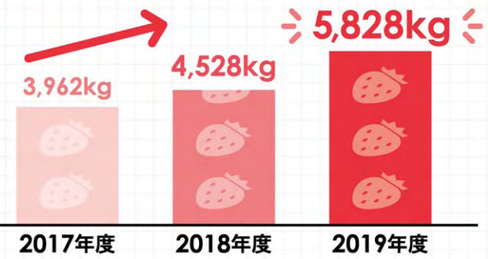
年々大きくなっているクラウンからは、茎がたくさん出ています！

クラウンとはいちごの茎の根茎部分のこと。ここから新しい葉やランナー（子株）が出てくるので、大きなクラウンが育っている苗はしっかり生育します。

●いちごの玉太りが良くなった

玉太りが良くなった結果、3Lサイズでの収穫が多くなりました。

●毎年、前年以上の収穫量を実現



1反当たりの1年間の収穫量

“6次産業化”への取り組み

小さなサイズのいちごは加工をして販売しています。フルーツビネガーの「あまおう酢」や、かき氷の「あまおうけずり」など、加工品の販売にも力を入れています。

あまおう酢

あまおうけずり

あまおういちごをそのまま凍らせて削ったかき氷。各地の百貨店のイベントでも大人気♪

※FFCパイロゲンは清涼飲料水ですが、ご本人の経験により生産工程で活用されています。　※掲載事項に関するご質問は㈱エフエフシー・ジャパンまでお願いいたします。

発行元：株式会社 エフエフシー・ジャパン　〒514-2293　三重県津市高野尾町1868番地の3　TEL：059-230-3595　http://www.ffc-japan.co.jp